



『語れ、内なる沖縄よ』

エリザベス・ミキ・ブリナ 著 石垣賀子 訳

みすず書房 刊

定価 3,960円 (本体3,600円+税)

沖縄人の母と米国人の父を持つ著者の、自分を探す旅の話だ。第二次世界大戦直後に沖縄で生まれた母と、沖縄に駐留した元米兵の父は、米国で著者を育てる。アジア人の著者は、白人ばかりの町で差別を受け、人との違いを日常的に思い知らされて孤独感を深めていく。やがて、悲しみと怒りを家族に向ける。英語が苦手な米国人と交流できない母を見下し、時代遅れのタフな白人男性像を守る父親に反発する。しかし、仕事や恋愛で苦労を重ねるうちに、母の孤独と父の慈しみに気づくのだ。同時に沖縄について学び始め、戦争の歴史や、米国や日本から強いられる不均衡な力関係を知り、一人の沖縄人としての思いを強めていく。

自身の半生と沖縄の歴史を交互に語る回想記に現れる著者は、自分が誰なのかと苦しみながら問い続ける。自己同一性の証明がマイノリティであるがゆえに得られない、その悲し

みと疎外感が胸に刺さる。

また本書は、戦争の悲劇とは人間の内側に転移し、消滅はしないと教えてくれる。沖縄は第二次世界大戦中に本土防衛の犠牲にされ、その後四半世紀に及ぶ米国の支配下に置かれた。米国支配中に輸入依存の産業構造に導かれたため、今も景気に左右されるサービスや観光業に頼るしかなく、経済は安定しない。国民年金制度の導入が遅れたために無年金で老後を迎える人が多い。米軍用施設の兵士や飛行機が引き起こすトラブルで地域住民が傷つけられ、命を落としている。たまたま、著者は米国と日本に向かって叫ぶのだ。「沖縄を解放せよ！」と。

著者が渴望の果てにようやく手に入れたアイデンティティを形成しているのは、戦争で理不尽に人生を取り上げられた無数の沖縄の犠牲者であり、また、今現在、理不尽に米国と日本の本土に苦しめられている沖縄の住民でもあるということに気づいた。その重さに胸が締め付けられる。沖縄の悲劇は終わっていないのだ。 (日本農業新聞 齋藤 花)